親子通園部ゆうでのサポートブック作成の取り組み

子ども発達支援センター愛　保育士　横田沙也加

１．はじめに

子ども発達支援センター愛では、児童発達支援センター「子ども発達支援センター愛 」、障害児通所支援事業所「子ども発達支援センター愛　親子通園部ゆう 」、相談支援事業所「子ども発達相談センター　ぽこ・あ・ぽこ 」、保育所等訪問支援事業の４つの事業を行っている。

「子ども発達支援センター愛　親子通園部ゆう」では、保護者が子どもへの理解をより深めるため、子どもにあった支援方法や対応を保護者が支援者と共通認識するために平成２４年度よりサポートブックの作成を行っている。今回は、その取り組みについて報告したい。

２．親子通園部ゆうについて

子ども発達支援センター愛において、親子通園部ゆうは早期療育、療育の入り口という位置づけで、２～４歳の子どもとその保護者の親子で週２回、１０時から１３時まで療育活動をしている。月・火グループと水・木グループの２グループがある。利用までの経緯は、保健師など関係機関からの紹介や保護者の気付きなどさまざまである。

（１）子どもたちの様子（平成２７年度３月時点）

①年齢

月・火グループ	２ 歳	３ 歳	４ 歳	計
男児		4	2	6
女児		2		2
水・木グループ	２ 歳	３ 歳	４ 歳	
男児	1	4	2	7
女児			1	1
				１ 6

②診断名

広汎性発達障害	染 色 体 異 常	未　　診　　断
7	2	7

（２）職員体制

保育士２名、児童指導員１名、作業療法士１名

３．親子通園部ゆうの年間目標

子ども：・ゆうが安心でき、楽しめる場所になる
・生活リズムを整え、生活習慣を身に付ける
・人と楽しく関われるようになる（集団生活に慣れる）

保護者：・仲間や職員に安心して、子育ての悩みを話せたり、相談したりできるようになる
・子どもを理解し、関わりの工夫や配慮をすることで子育てがしやすくなる
・家庭での様子も共有する

利用する子どもの大部分が、親子通園部ゆうが始めての集団の場、園生活の場となる。そのため、安心して通園できる環境を整えることを大切にしている。そうすることで、楽しめる遊びを見つけ、職員や友だちとの関わりも楽しめるようになるのではと考えている。楽しいことを経験することが興味関心を引き出し、意欲につながると感じている。保護者には、療育施設を利用することへの不安が強い、精神的な不調がある、子育てに対する自信を失ってしまっている、どう育ててよいか分からず困っているなど程度の差こそあれ、ほとんどの方が様々な悩みや不安を抱えられている。園に通い、日々の活動や行事に取り組む中で子どもへの関わりのヒントを得たり、保護者同士のつながりを築いたりすることが大切だと感じている。

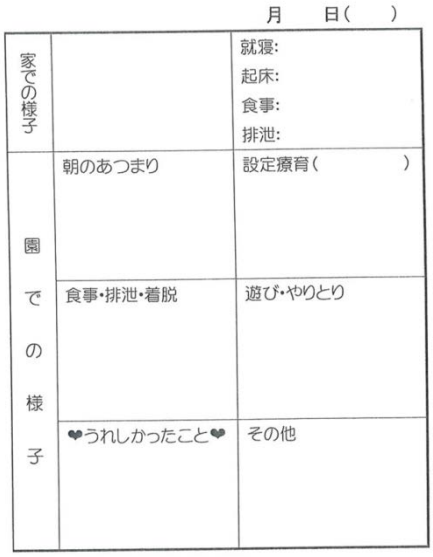
４．サポートブック作成の取り組み

１学期	療育記録の記入　ペアレントメンターさんとのお話会
２学期	お父さん参加日（計画書作成）　秋遠足（計画書作成）
３学期	第２回お父さん参加日（計画書作成）　サポートブックの作成・発表会

（１）１学期

①記録の記入

年間通して、登園された日には毎回その日の子どもの様子を保護者に記入していただいている。毎回の記録の記入が子どもの様子をよく観察し、文章化することになり、サポートブックの作成に役立っているように感じる。



【資料１】記録用紙

②ペアレントメンターさんとのお話会

母子通園を経験されたペアレントメンターさんを招いてお話会をしている。その際にこれまでに作成されたサポートブックを見せていただき、活用方法を教えてもらっている。実際に作成、活用された方のお話を聞くことで必要性を知ってもらうことができている。

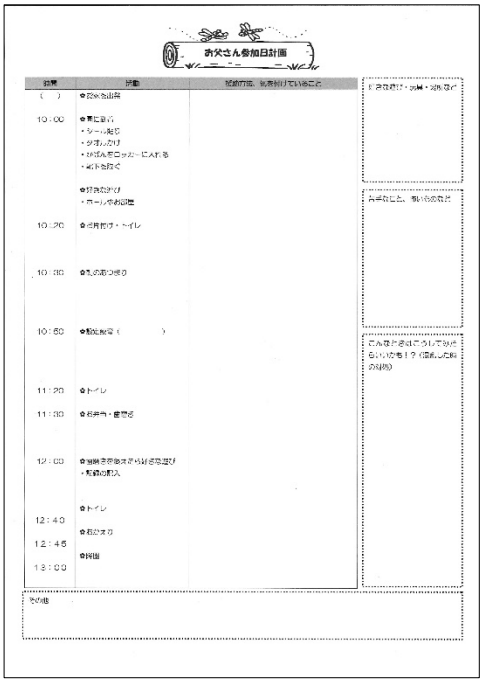
（２）２学期

①お父さん参加日

お父さん参加日とは、父親とお子さん二人で登園をする日である。父親が難しい場合には家族のどなたかにお願いをしている。この日に向けて、母親（普段療育に参加している保護者）には計画書を作成していただいている。計画書を作成し、事前に父親に園生活でどんな配慮や工夫をしているかを説明してもらう。母親にとっては、子どものことを人に伝える練習の機会になる。

計画書には一日の流れ、援助方法、気を付けること、好きなこと、苦手なこと、困りそうなこと等を記入できるようにしている。

お父さん参加日に備えて、事前に両親そろって療育に参加されたり、「何が知りたい？」と両親で話し合いながら計画書を作成されたりと、家族で子どもへの理解を深める機会にもなっている。


お父さん参加日計画

時間	活動	配慮方法、気を付けていること
（　）	●段ボール出発	
10：00	●車に乗る ・シール貼り ・ダルッたり ・おもんちゃ箱に入れる ・メモを書く	
	●好きなあそび ・ボールやお絵描き	
10：20	●活動前・トイレ	
10：30	●気のあつまり	
10：50	●製品展望（　　）	
11：20	●トイレ	
11：30	●お弁当・食べる	
12：00	●後始末（食べられる容器は・・・ ・荷物の整理	
	●トイレ	
12：40 | ●着がえ | |
12：45 | ●帰宅 | |
13：00 | | |

お手伝いなど、楽しみの工夫

こんなときはこうしてあげるといいかも！？（困ったときの対処）

その他

【資料２】お父さん参加日計画書

参加日後に、父親からは「大体の流れが分かってよかった」「事前に参加をしていてある程度わかっていたが、確認できてよかった」「対処に困った時、事前に読んでいたのでスムーズに対応できた」「子どもがつまずくポイント等が的確に書かれており、各々の局面での対処に大変役立った」という感想があった。

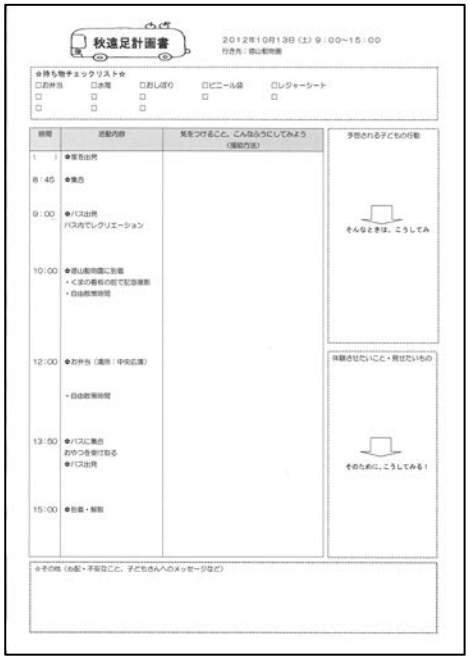
作成した母親からは「分かりやすく伝えるための記入の仕方が難しかった」「子どもの様子を整理することで少し心の整理にもなった」「自分がどんなことに気を付けているかわかった」「改めて子どもの得意なこと、苦手なこと、つまずきやすいところを把握できた」という感想があった。伝える難しさも感じられた方もいるが、伝えたことで

父親と子どもが楽しい時間を過ごせたことを喜ばれ、伝える大切さを感じる機会になっているようである。また、子どもの行動と母親自身の働きかけを整理することもできる機会になっている。

③秋遠足

親子でのバス遠足でも計画書の作成を行っている。バス車内や出かけ先での落ち着いて過ごすための配慮点や楽しむための工夫を記入し、バス遠足に臨んでもらっている。予想される子どもの行動に合わせて、必要な援助方法やアイテムを用意して当日を迎える。

計画書には、持っていくもの、一日の流れ、援助方法、予想される子どもの行動とその対応策、体験させたいことを記入する欄がある。



【資料３】秋遠足の計画書

遠足当日は、戸惑う子どももいるが、母親が事前に用意しておいた援助方法やアイテムを使用することで、大部分の子が遠足を楽しむことができている。子どもと楽しく遠足を過ごせたことが、配慮や工夫の大切さを実感できるのではないだろうか。また、遠足の成功体験が母親の自信につながっているように感じる。

（３）３学期

①第２回お父さん参加日

第１回目と同様に計画書の作成を行っている。第２回目の計画書に関する感想では、父親からも母親からも「子どもの成長を感じることができた」「数か月後に見返した時に子どもの成長を感じられるように大切に保管したい」という感想が大半であった。この機会に、定期的に子どもの様子や関わり方を書き、子どもの成長の確認する大切さを伝えたいと思っている。

②サポートブック作成

サポートブック作成にあたり、書式（印刷したものとデータ）、サポートブックのしおり、記入例を用意し保護者にサポートブックの目的を説明している。ゆうでは「次年度に関わる支援者がお子さんとスムーズに関わりが持てるようにするため」、「成長の記録を残すため」、「保護者がより子どもを理解するため」という３つの目的で作成を行っている。

項目は、プロフィール、成育歴、発達検査・知能検査の結果、両親からみた子どもの印象、いつも大切にしていること、気を付けていること、生活リズム、健康状態、移動の方法、好きなこと、苦手なこと、食事、排泄、着脱、清潔、コミュニケーション、家族の想いがある。必要に応じて取捨選択してもらい作成をしてもらう。

３学期の午後には、母子分離をして過ごす時間を設けているので、その時間を利用して、部屋を提供し、母親同士で集まって作成をしていただいている。お互いのサポートブックの進行状況を確認したり、子どもについて話したりしながらにぎやかに作業を進められている。

作成の合間に、職員も見せてもらったり、相談を聞いたりしながら子どもの様子を一緒に確認をしていく。たくさん書きすぎてしまう方もいるが、初めてのサポートブックは思っていることをどんどん書き出すことが、子どもの行動や援助方法を整理することになるので大切だと考えている。卒園された保護者に更新したサポートブックを見せてもらうことがあるが、どの方も更新をするたびに内容が洗練され、より良いサポートブックになっていっている。

パソコン作成の方が更新しやすかったり、書式のアレンジが簡単にできたりというメリットがあるが、パソコンが家にないや使用方法が分からない等の理由があり、手書きで作成される方が半数くらいいる。手書きではあたたかみが伝わる、どこでも作成ができるという点がメリットのようである。

③サポートブック発表会

発表会は、一年間同じグループで過ごした保護者を集めて行っている。まずは、作成していただいたサポートブックを全員で回し読みをする。その間は、「〇〇ちゃんこんなことができるんだね」「この書き方わかりやすい」等感想を言いあったり、家族の想いを読んで涙を流されたりということがある。発表していただく内容は①作成するときに工夫したこと、②サポートブックを作成して発見したこと、③作成してみての感想、④活用方法である。以下にその内容をまとめる。

作成するときに工夫したこと	・なるべく普段の様子をそのまま書くようにした ・発達障害を知らない人でも分かりやすいように気を付けた ・子どもの行動を一つずつ確認した。分かりやすいようにことばを選びながら書いた ・簡潔に書くようにした ・声掛けや手添えで教えること多いので、そのことを具体的に書いた ・成育歴は病気のことがあるので、詳しく書いた

	・リハビリの先生や主治医からも意見をもらって書いた ・誰がいつ読んでも分かりやすい表現にした ・読んでもらいやすいように写真やイラストを入れたり、大事なところは文字の色を変えたりした
作成して発見したこと	・短い期間でも成長していることに気付いた ・苦手なこともあるが、好きなこともいっぱいある ・子どもが成長していることがわかった ・自分自身では子どものことを分かっているようでわかっていなかった。他のお母さんに教えてもらった ・子どもと向き合う良い機会になった ・リハビリの先生や家族、他のお母さん、職員など他の人に聞くと、自分の知らない子どもの姿を発見できた ・項目によって成長の幅は違うけど、この子なりに成長していることがわかった。 ・一年前に比べて、自分でやりたいという気持ちが出てきている ・できないことに目が行きがちだったが、サポートブックにすると実は楽しめることが増えていた。少しずつ成長していることがわかった。 ・できることできないことの確認ができた
作成してみての感想	・思っていた以上に書けた ・成育歴が一目見て分かるようになったのでよかった ・自分の思いを吐き出すことができた ・母親、父親、互いに子どもの見方が違うのだなと思った ・書けない箇所が多く難しかった。できないことがまだ多いなと思った ・文章にするのが難しかった ・子どものことを振り返ることができた ・障がいがあるないに関わらず、幼児期に子どもとしっかり向き合う機会が持ててよかった。 ・作成中は子どもの立場になって考えることが多くいい経験になった ・子どもの様子、性格が改めてよくわかった ・一日２４時間一緒にいるのに、どうだったかなぁと考えることがあった ・なかなか大変だった ・夫と一緒に作成をし、夫婦で子どものことを見つめなおす機会になった ・どういう人間になってほしいか、子どもの将来を考えた
活用方法	・就園先の先生に見せたい

	・就学時にまた更新して、就学先に渡したい ・成長記録として残したい ・出産をするときに祖父母に預けるので、その時に読んでもらおうと思う
その他	・次回作るときの基盤ができてよかった ・書きすぎて読みづらくなってしまった ・他の方の良い表現やアイディアを参考にまた作り直したい

５．取り組みを通して　今後の課題

（１）書くことが苦手な保護者への対応

文字を書くこと、文章を作ることが苦手は保護者が利用されることがある。これまでは、個別に文章の作成などをお手伝いしていたが、写真やスマートフォン等を活用する等して「自分で作った！」という達成感が持てるように工夫していきたい。

（２）幼稚園、保育所等の関係機関へのサポートブックの周知

せっかくサポートブックを作成しても、「過保護な親と思われたらどうしよう」と就園先に提出することができない保護者がいる。幼稚園、保育所がサポートブックについての理解があると保護者も提出しやすいように思う。就園をされる時には、申し送りに幼稚園、保育所に伺っているので、その際にサポートブックについてお知らせをしている。ほとんどの園から好意的な反応をもらえている。保護者と園で子どもを共通理解するために便利なものであるので、ぜひ周知していきたい。

６．おわりに

サポートブック作成の取り組みをしていると、保護者の子どもへの想いを話していただくことがある。様々な事情や複雑な心境のなか、親子で療育に通い、日々の子育てに向き合われていることがわかる。

サポートブックの作成過程で仲間と情報交換をしたり、家族や関係機関と一緒に子どもについて考えたりすることができる。また、サポートブックを子どもと関わる人や機関に渡すことで子どもについて知る人を増やすことができる。よって、サポートブックを通じて、保護者や子どもを支える人や機関のつながりを深めることができるのではないだろうかと考える。

サポートブックの作成の取り組みを今後も続け、微力ではあるが保護者を支えていきたい。それが、子どもたちが安心して楽しく面白い毎日を送ることにつながるといいなと思う。